

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 3年 2月13日
(94号)



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 学塾・中之島事務局

人間学講座
第99講

「一〇〇人の一歩のゐる」
「一人の一〇〇歩」
本南一志先生



■一〇〇人の一歩

去年も人間学塾に來させていただき、賑やかに食事もいたしましたのに、今年は一転全く違う状況となりました。明日には何が起るか分からない、というほどの世の中の変化です。昨年の三月以降、予定は真っ白となり、コロナのお陰でいろんなことをさせていただけるようになりました。毎朝六時半から二時間くらい掃除もできるようになったので、随分その範囲も広くなりました。

私が掃除に向き合ってきた、二〇年の節目を越えました。そこで気づかされたのは、「一〇〇人の一歩」ということです。鍵山秀三郎相談役は「世の中を変えていくのに必要なのは百人だ。一歩踏み出す、そのたった一歩の勇気の大きさだ」と常に説かれておられました。皆さまには、一人で一〇〇歩歩む気持ちで世の中を変えていただきたいと思います。勇気があればどんな人でも変わることができる。その勇気とは、「一歩を踏み出す」ただそれだけです。

一人の目覚めた人間の力によって全体が変わることがある。二〇年間掃除を続けてきて分かったことは、 $0+0+1$ になることがある。0を懸命に積み上げていくと、 $0+0+0+\dots$ ずっと続けていくことで必ず1が生まれてくる。無から有が生み出されてくるのです。

■小さなことを積み上げると

鍵山相談役は、大きなことでなくてよい、自分のできることを一枚ずつ薄紙を重ねるよう実行すればよいと言われました。しかし自分を振り返るに、その薄紙を千枚重ね続けたとき、その上でふんぞり返る自分がいたのです。千枚目の次に何を重ねればよいのか。それは「初心」、その一枚が

載ると千枚は0になる。しかし千枚が消えたのではなく、それは地面の中に入って「根っこ」となる。根っこがどんどん伸びてゆくのは、自分と向き合っていると自ずと分かるようになってきます。理屈で分ならずとも、掃除で汗をかいているうちに、「見えないところの力の強さ」が分かるようになってくるのです。

一〇〇人の一歩のために何が必要か？見えないところの積み上げがどれほどか、ということではないか。ただし、それは単にやり続けた期間ではなく、自分に振りかかることから逃げないこと、どれだけ真正面から向き合うかということではないでしょうか。そうするうちにやればできる、ということが自分の中に積み上がっていくように思います。

経験値を積むことで四〇分かけて掃除していたところが、三〇分できれいになる、というように、何でも年数を重ねると技術力は上がります。しかし人間力はどうか？技術力はあっても根っここの浅い木になつてはならない。逃げずに真正面から向き合うことは、人間力の根を張るためにも大切なスタンスでしょう。

「損」と「益」は相反するものです。自分が少しでも世の中のお役に立てるよう考えるなら何ができるか？鍵山相談役から「大きなことをしようとする、心が小さくなる。小さなことを積み上げると、心は大きくなる」と聴かせていただきました。

ほんの少しだけでもできた！という自分自身の中に灯る小さな灯火が自分を勇気づけてくれる力になってゆくと感じます。

■本物は続く・続けると本物になる

掃除を続けてきて実感するのは、自分の人生の



彩りとして、これほど素晴らしいものはないということ。出合うべくして出合い、辛い思いもしながら懸命に取り組んで続けてきて、今ようやく、自分の人生は掃除に出合ったお陰で素晴らしい花開くことができた、と自信をもって言えるようになってきました。

掃除のほかにやはり相談役から教わり、続けていることのひとつに「複写はがき」があります。昨年は一日十枚を目標に決め、正月から書き続け、達成することができました。五〇枚綴りの複写はがきの控えが八〇冊、四〇〇枚になりました。これも、書かせていただけた人がおられるから、書くことができるわけで、続けられるのです。

「1+1=0」は「品位をあげる法則」としました。1を懸命に「今日しかない、今日一日やろう」という思いで毎日積み上げてきて、身につくと0になる。相談役の言われる「これまで重ねた努力をやめてしまふともったいない」と言われる意味が、最初わかりませんでした。しかし今、掃除を二〇年続けてきて、実感として分かるようになりました。これまで努力を積み上げた結果、身についたら0、つまりそれは、ほうっておいてもできる、ということ。品位というのは、その人が身につけたものです。すなわち1+1=0にしていくための一〇〇歩となるのです。

「一つは始まりであり、一つはすべてである」これは、特攻「白鷺（はくろ）隊」の一人である栗永照彦さんから教えていただいた言葉です。「陛下の御聖断がもう少し早かったならば状況は変わっていたのではないか」と尋ねた私に、栗永さんは鬼の形相となり「歴史に『もし』は、ない」と言われ、先の言葉を教えてくださったのです。命を擲つてこの国を守ろうとした先人のお陰で私たちは今こうして生きています。一つは始まりであり、一つはすべてであるのならば、このたった一つの命を世の中を良くしていくために使っていきたいと思います。

(抄録 中川千都子)

《リモート講座体験談》



◆「感動語録」

角高憲治

まず、今回もリモートで参加させていただくことができました。世話人の方々の色々なご苦労や試行錯誤、創意工夫があったればこそと、心より感謝いたします。また、予め先生のレジュメを頂いておりましたので、テーマの「100人の一歩のための一人の100歩」という事について、私なりに考えたりもしました。「一人の100歩」とは、立腰を貫かれた森信三先生、掃除道の鍵山秀三郎先生、ハガキ道の坂田道信先生の方々の生き方や、実践をいうのであろうと想像しました。そういう先人の並々ならぬ努力のお陰で、私たちは貴重な一歩を踏み出せているのだと思ったのです。

木南先生は、もう何歩も踏み出されています。鍵山先生の後を受けて人間学塾の講師を6期続けて頂けるのは、私たち塾生にとつてとても幸せです。

冒頭に話されたように玉田泰之先生のお教えを守り、レジュメを自分の書いたもので用意するということを続けてこられました。これは口で言うほど簡単なことではないと思います。

今回、「無」から「有」ということで、0+0=1の数式から始まり、最後には品位を上げる法則とし

て、1+1=0の数式を示されました。

理科頭の私としては到底理解できる数式ではありませんが、一所懸命に考えるきっかけにはなりました。無駄な努力と思えても、諦めずに続けていると必ず報われる時が来る。場合によっては自分が死んでからも知れません。「答えは出すものではない」のところで、灘校の橋本武先生の教育実践を紹介されました。「答えは出るんだ」と言うところに感動した次第です。

中村隆行

人間学塾のリモート講演の開催ありがとうございます。前回は所用で参加出来なかったのですが、今回が初めての参加になりました。

Zoom会議は、会社では良くやっておりますが、今回は、加藤さんが適切な操作をしていただいたおかげで、大きな会場に関わらずきれいな画面で講演を聴けて良かったです。

木南先生の講演は、1回目からずっと聞いております。同じ地域ボランティア活動をしていることもあり内容が理解しやすいのと、木南先生の独特の語りをいつも楽しみに聴いております。

この大変なコロナ禍の中、中之島で塾を開催、さらにリモート講演まで実施して頂いている世話人の方々には感謝の言葉しかありません。

それから、勤め先の本社が堂島にあり通常は、月1回は出張していたのですが、コロナ禍のため当分は出張禁止となり、感染が治まるまでは、大阪に行くことが難しい状況です。それもあって、今後リモートの参加となりますので、よろしく願います。

ただ、私としては、中之島の「非日常空間」で皆様とご一緒に学習することにより、パワーを貰っておりますので、早く収束して、中之島の塾生・世話人の皆様に直接お会いしたいと切に思っております。

【参考資料】

「産経抄」 令和2年10月29日より抄録

全日本空輸（ANA）の創業者は、朝日新聞の社長も務めた美土路昌一（みどろ・ますいち）である。敗戦後、GHQは日本のすべての航空事業を禁止した。美土路は、失業したパイロットや航空整備士を救済するための組織「興民社」の会長を引き受ける。

▼美土路の評伝「現在窮乏 将来有望」（早房長治著）によれば、興民社は「何でもやる、たくましい会社」だった。旧陸軍から払い下げられたトラックを利用してタクシー業や運送業から、地方で食料を集めて東京の闇市で売る商売にまで手を出した。

▼倒産の危機に見舞われると、美土路は自らの書画骨董（こつとう）を処分して埋め合わせた。ようやく航空事業が認められるようになって、航空機を買う余裕はない。全日空は昭和27年、ヘリコプター2機と30人の役員社員でスタートした。

▼世界のトップクラスの航空会社となった全日空は、創業以来の危機を迎えている。新型コロナウイルスの感染拡大による航空需要の低迷が大打撃となった。赤字は過去最悪の5100億円に達している。

▼全日空を傘下にもつANAホールディングス（HD）が発表した事業構造改革によれば、400人以上の社員を外向させる。外向先には、家電量販店やスーパーマーケットが含まれている。慣れない仕事への不安もあるだろう。一方「何でもやる、たくましい会社」という原点に戻ったともいえる。

▼「私にとつての生きがいは、日本の大空を再び飛び回る飛行機野郎たちの喜々とした姿を見ることです」。こんな言葉を残している美土路が、創業時の悪戦苦闘のなかで発案したスローガンが、「現在窮乏 将来有望」である。歴代社長はもちろん、社員なら知らぬものはないといわれる8文字の出番が、再びやってきた。

《森信三先生に学ぶ「陰徳下座の行」》

◆ 凄絶な生き方

過去いくたびとなく、近郊へご出講の際は、拙宅へお立ち寄り頂き、ときにはお泊まりも頂きました。その節にはお願いし、色紙にご揮毫いただいたものです。ある時、お書きくださったのは、「バケツは底が大事」でした。浪費癖のわたくしへの戒めか、それともご自身への自戒のことばかりと考えましたが、そのいずれを問わず、ケチのためでなく、身を引き締めるためです」と。

☆ また、「わたくしは、天王寺師範の時代には、白墨は、こ同僚の使い捨ての中から比較的ましなのを選んで使うようにしてきました。それがいつしか身についたらいいのです。そして過去六十年間身について抜けないのです。」と

☆ また「わたくしはあなたとは、金銭感覚が違いますよ。わたくしは、小作農のどん百姓のもらわれ子です。養父が肩引きの荷車に米俵を積んで年貢米を納めに行く後ろ姿が、目に浮かんで忘れないですよ」と。

ここまでお聞きいたしますと、森先生ご自身から教えられた「人間形成の原理」に思いを致さねばなりません。

☆ 人間形成の理とは

一、遺伝または素質

二、境遇もしくは逆境

三、師もしくは先輩より受けた感化力

とありますが、森先生こそ天からの使命を受けて形成せられた最高傑作の一人ではないかと思うのです。素質の上に、幼児期の温かい境遇、そして成人なされてから受けた逆境の鍛え、それに恵まれたもろもろの師と、自ずから求めて得られた野の思想家群像より受けた感化影響等々、考え合わせてみますと、天のなせるわざとも思うのです。

そうした形成過程を経られた先生は、三十六歳を機に処女作『哲学序説』を執筆、かつ三十八歳には、『修身教授録』の講義筆録となり、これが今なお人をして奮起せしめずにおかぬ感動的な書物として、人から人へ読み継がれているのです。

その後、招きに応じてはどんな僻地もおおいとなく全国講演行脚の旅を続けられつつも、いささかも多彩な執筆活動は衰えず、短時日に、一気呵成に書き上げる専心集中力は、まさに神業に等しいものと驚嘆させられるのです。

戦後は、『国と共に歩むもの』(全5巻)を記され、教育に関する著述はもとより、哲学5部作を古稀記念としてまとめ上げられ、そして、哲学大系の金字塔を樹立せられました。

そして、一代の著述を多面的にまとめられたのが、『森信三全集』二十五巻であり、今は、古書店で求められない稀覯本となっておりま。

そこで一息つくのが、人情の常であります。全巻完了後(七十五歳直ちに執筆せられたのが『幻の講話』全五巻であり、これが先の『修身教授録』に次いでまた講話形式ですが、これが一代を貫かれた心願の書なのです。まさに、民族の立場を超えて人間の生き方について永遠の光明を投げる一大著述なのです。

◆ 隠者への憧憬

森先生は、ある時ふと漏らされたことがございます。

「わたくしは決して隠者ではない。がしかし、隠者への憧憬において決して人後に落ちるものではない」と。

森先生の著述せられた歌にも、

「一人の隠者の心幽けくも追ひ求めてぞひと世過ぎしか」とあります。

わたくし自身は、名利の念は断ち切ることはできぬが、名利を超えて、縁ある人と生活を共にしつつ、おのが節を枉げず、その生涯を全うせられた一人の隠者その人を追い求めているうちに、はや一代も終わりに

近づいたものよ。とのご感懐と受け取っております。

さて、その隠者とはどなたであつたかと言え、わたくしの想像するところでは、近江聖人とたたえられた中江藤樹先生であり、広島高師の西晋一郎先生であり、明治期の知られざる人、新井興達先生であろうかと思われま。そのいずれかの一人か、もしくはその人たちに共通する「幻」の像こそ、それにふさわしいと思えます。

この「幻」の師を想定して、創作せられたのが、「幻」の三部作であり、(一)「隠者の幻」(二)「幻の講話」(三)「ある隠者の一生」を総括します。

こうして「隠者への憧憬」が形となって後世への願いを込めて、遺されたのが、この「幻」の三部作なのです。

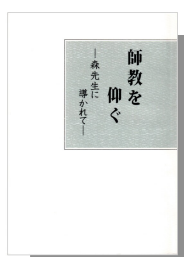
今こうして「森先生の下座行について」執筆の機会を与えられ、拙文を書き進めてまいりましたが、改めて痛感せしめられることは、先生の内に燃えるもの、求道上の一念は、隠者への憧憬であり、伝導上の心願は、民族の再建であり、世界への貢献であろうと、お察しするわけです。

このような憧憬と心願の上に立って日常実践の行と教えが生まれ、思想と学問が生まれ、執筆と講演行脚の、比類なき業績と足跡が遺されたものと思えます。

『師教を仰ぐ』

森先生に導かれて

寺田一清 著より抄録



《人間学塾・中之島》

令和3年3月カリキュラム

*日時 3月13日(第2土曜)

午後1時〜5時

*場所 大阪大学中之島センター(10F)

▼第一部 午後一時〜 午後二時五〇分

*講師 小松遊平先生

「シキ即是空 花咲かそ」

1929年 岩手県生まれ。戦後間もなく両親が南部煎餅屋を創業した。

「永続は道徳性による」との父の考えから道徳教育の麗澤大学に進学したものの退学し挫折の青年期が始まった。親不孝、兄との確執など泥沼状態の中で師を得「天の理、人の道」を教わった40年間だった。現在、株式会社 巖手屋副社長。公益財団法人モラロジー研究所 東日本生涯学習センター長。

▼第二部 午後三時〜 午後五時

*講師 白駒妃登美先生

「ひのもとを国を支えてきた

先人の志と皇室の祈り」

埼玉県生まれ。福岡市在住。

幼い頃より歴史や伝記の本を読み、福沢諭吉に憧れ、慶應義塾大学に進学。卒業後、日本航空の国際線CAとして『年半勤務。大病をきっかけに、命と向き合い、歴史上の偉人の生き方を紐解くなかで、天命追求型の生き方にシフトする。2012年、株式会社ことほぎを設立し、日本の歴史は、報恩感謝の歴史であることを伝える講演活動を本格的に開始する。

※例年3月は「宿泊研修」未だ終息が見えないコロナ禍の影響により、会場を大阪大学中之島センターにて右記に記載の13日(土)一日のみの研修に変更しました。

《芳信抄》

東京都 鍵山秀三郎先生

上甲晃先生が、現代人は「目に見えないものを信じる力を失った」と、警告されました。戦後日本にとって、最大の災禍であつても、高く強い志さえ持ち続ければ道は拓ける。と、教えていただきました。人間学塾の講座を催してくださったからこそ学ぶことができました。

埼玉県 山下武彦様

巻頭の上甲先生のご講話にあるように、松下幸之助氏のお言葉にあるように「志あれば困難もすべてチャンス」と捉え、リモート講座を開催されたことは、誠に素晴らしいことでした。

世話人や塾生の方々が語られているように、これまでも変わらず、感謝と真剣さで講座に聴き入り、リモート討議も盛り上がったようですね。

寺田先生のご著書から「陰徳下座の行」にも学ばせていただきました。

鹿児島県 中島和之様

上甲先生の開講の信念を学ぶことができました。こういう時こそチャンスだ。チャンスととらえて頑張るべきだ。と、強く教えられました。克服するための策を十分に施した上で、今が頑張り時だと。

埼玉県 大出雅一様

コロナ禍の自粛期間に『松下幸之助発言集』読破された上甲先生の熱弁がよく伝わってくる講話録でした。これからの世を背負う青年に向けられたことばであっても高齢者の私が伺っても心揺さぶられました。『ピンチをチャンスに切り替える』これは信じる力と使命感を持っていきることから生まれる。コロナ禍を突破

する意気は、そこから生まれてくる。私は上甲先生の言葉をこのように受け留め、これを力に生きていきます。

愛媛県 桂 誠司様

ズームで開催とは、文明に感謝ですね。

上甲先生のお話には、いつも魂を奮い立たせてくれるものがありますね。関西もコロナ禍によって大変なことになっておりますが、ご自愛ください。

宮城県 加藤秀夫様

上甲晃先生のご講演の講話録、中川千都子様の報告はありがたいです。

今時のコロナ禍こそ天の啓示として「志をもつて難局を切り抜ける使命感を持つこと」「感謝と素直に生きること」は、大きな学びとなりました。

愛知県 坂部智一様

コロナ禍の下、拝読させて頂き、ありがたいです。平時より深く身体に入ってきます。

身の周りに起きることが、万物生成発展の法則と教えていただきました。以前からお話しくださっていたと思いますし、読んでいたと思うのですが、ようやくかせていただきました。

人の師たる人は、とりわけ下座の体験者。寺田先生のお言葉、先生を思い出します。

岡山県 柴田久美子様

コロナ禍で「自宅以最期を…」というご依頼が急増しています。

上甲先生の講座で「肚をくくる」が心に響きます。本日もご家族に抱いて看取って頂く中で、コロナが日本人の親孝行に灯をつけたと感じる私です。